

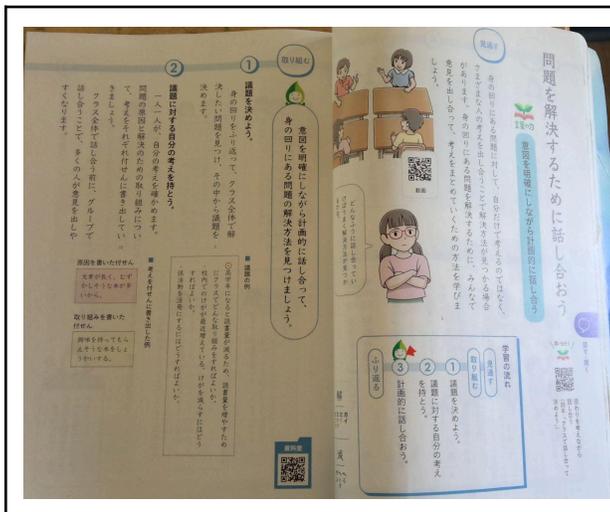
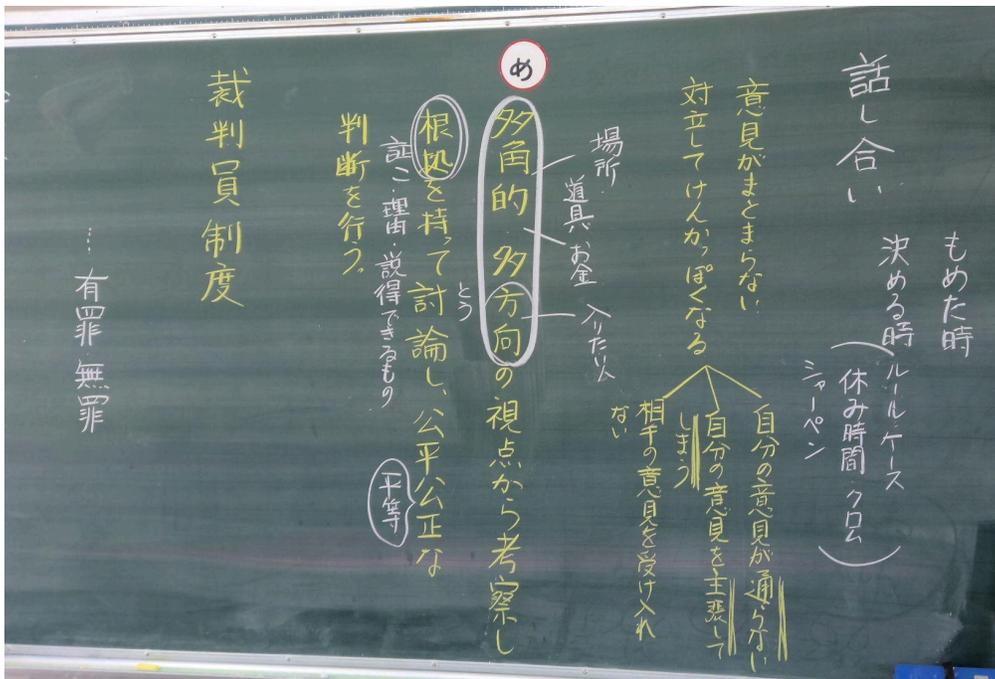
# 12月16日 5年生 国語「問題を解決するために話し合おう」

授業改善担当の先生が、T1で進めていました。

## 1. 課題設定・動機付け 「話し合い」

まずは、「話し合いってどんなときにする？」といった簡単な発問から、この単元のポイントや動機付け、課題設定の時間を20分ほどかけて、進めました。

- ・どんな時に話し合う？・・・もめたとき・何かを決めるとき  
(ルール、休み時間、シャーペン)など
- ・めあては？……………多角的、多方面の視点から考察し、根拠を持って討論し、公平、公正な判断を行う。
- ・役割(裁判に関わって)・・・裁判員制度、裁判官・弁護士・被告・検察官の役割について

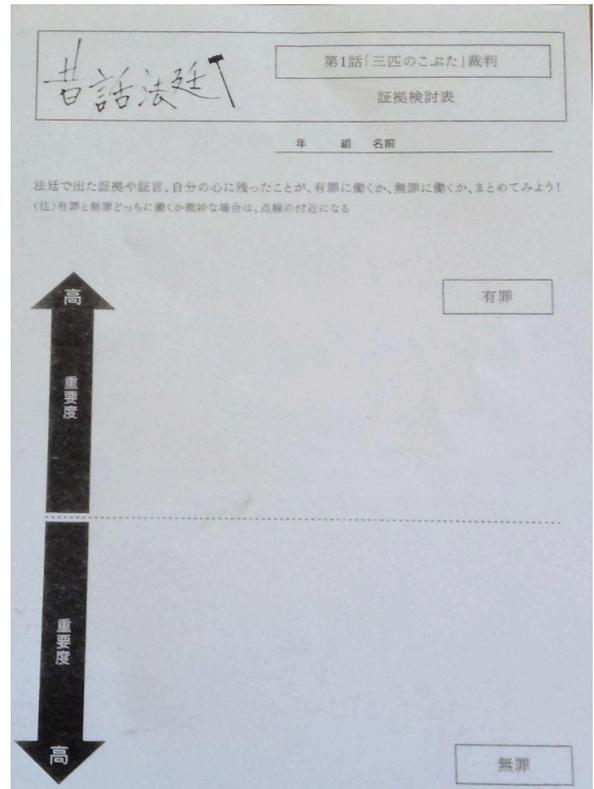


児童の生活に関連するおもしろい単元ですね。ただ、こうした単元、計画的に進めていないと、時間数が押して、行き当たりばったりだったり、ポイントだけ伝えて終わり・・・といった状況にもなりかねません。むずかしいですよ・・・。

5年生では、感情的になってしまいがちで、話し合いがむずかしいといった実態もあって、ここの単元に力を入れたいと思ったそうです。



みなさんご存じNHKの「昔話法廷」です。  
 お話は、「三匹の子豚」です。  
 あらすじは、三匹の子豚が家を建て、わらと木の家は狼に壊される。二匹はれんがの家へ逃げ、煙突から入った狼は鍋で煮られて退治される。最後は助け合い、努力と知恵の大切さを学ぶ物語。  
 なのですが、ブタは、オオカミを殺した(計画的犯行)とブタは自分の命を守るために仕方なく、殺した(正当防衛)の論点がわかりやすくフィーチャーされていました。



## 2. 有罪側と無罪側と裁判長(司会)に分かれています。



### 【裁判の争点】

- 被告人: 三匹のこぶたの末っ子、トン三郎。
- 罪状: 煙突から侵入してきたオオカミを、沸騰した大鍋に落として殺害した殺人罪。
- 検察側の主張:
  - 事件3日前に大鍋を購入し、鍋の準備をしていたことから、計画的な「殺人(計画的犯行)」である。
  - オオカミの母親の証言(「豚肉パーティー」のメモ)も計画を裏付ける。
- 弁護側の主張:
  - 突然家に入り、自分を食べようとしたオオカミから身を守るための「正当防衛」である。
  - (鍋のお湯は)たまたま夕食の準備をしていたもので、オオカミを誘い込む意図はなかった。

以上のような前提で話し合いました。もちろん、これだといった絶対解はありません。  
 子どもたちがどう考え、根拠を持って、どう伝えていくか、論を重ねていくかが見ものです。

## 3. 裁判開始

まず、裁判長から担任の先生が指名されました。

「自分の身を守るためとはいえ、いのちを奪うのはよくない。だから、有罪です！」

つぎに、私が指名されました。

「わたしは、無罪です。その理由は2つあります。1つは、まずこういう昔話ってオオカミ悪いじゃないですかー？だから、ブタは悪くない。

2つめは、いのちを奪ったのは、自分のいのちを守るためだから、仕方ないと思います。この事件はどこで起こったのですか？(家)どこの？(ブタ)そうなんです、ここでオオカミの家でいのちを奪ったのなら、殺そうという気持ちがありそうですが、ブタの家です。殺されると思ったから、やり返しただけです。だから、わたしは無罪だと考えます。」

児童:「それは、憶測です！オオカミが悪いなんて、決まっています。」といった明らかに偏った考えに指摘が入りました。

話が飛び交う中で、一人の児童が発言した時に、周りから「よくわからへん。意味が分からへん。」といった声が出ました。それに反応して、「もう！なんでぼくの時だけ、そんなことなの！？」と感情的になってしまいました。

実際の裁判でも、感情的になって泣いたり、怒ったりはあるかと思いますが、ここで授業者から「それやん！そうした自分の考えが相手に伝わらん時に、怒ったり、泣いたり、すねたりするん じゃなくて、どうしたら伝わるか考える勉強やで！！」

といった勉強だけで終わらないブリッジングがありました。



#### 4. 授業の活性化・活発化

話が白熱してきたところで、証拠を出すために、同じ考えの人同士で話し合う場を設定しました。また、議論が煮詰まってきたなあと感じた時には、逆に、考えのちがう人同士で話し合う場の設定もありました。



## 5. まとめ

まとめとして、

「多角的に、感情的にならず、根拠をもって説得すること。自分の思い通りにならないときに、どうするか探し求めて、自分の意見を言ってください。」

「人がケンカになるときは、たいていこうした決めつけや思い込み、自分の思い通りに押し通そうとするというのが入り込んでいます。だれかがやっている、気づいても自分でやっていると感じにくいものです。こうしたことを頭に入れて、友だちや家族と関われるようになると、ケンカや争いが少なくなってくると思います。」

と授業者から伝えていました。